
3 お国言葉

シェフィールドについて5日。どうも日常会話の調子がでない。どうしたものだろうと考えていたら、ものすごい本を見つけてしまった。

「シェフィールド語－初心者のための用語集－」だ。市の出版部が出している本だから、そういう加減なものではないはずだ。

まずショックを受けたのは、youにあたる言葉に、theeや、tha、thi、da、de、などがあるというのだ。thouはyouの古語だから、古い言葉が残っているのだろう。しかし、こういう基本的な言葉がわからないと、会話には致命的だ。

5年前に、イギリス南部のサウサンプトンに着いたときも、かなり苦しんだ記憶がある。大家さんの話がさっぱり聞き取れないのだが、しばらくすると、「私」のことを「オイ」と発音しているのがわかった。銀行の窓口の若い女性も、todayを「トダイ」と言う。oftenを「オフン」と発音する人にいたっては、ほとんどいないといっても良いくらいだ。自分たちは共通語を話す自負している先生方も、こればかりは「オフトン」になる。その話をしたら、「オフトン」が正しいと胸を張って言われた。

さて、問題の本だが、少し例を紹介してみよう。－の右がシェフィールド語だ。

head-eead、no-neow、yes-are
house-owse、school-skoyal
tonight-toneet、などなど。

まったく違った言葉となるのは、drink-sup、mouth-gob、cigarette-fag、など。比較的共通しているのは、howがowとなるように、頭のhが消えることだ。フランスの博物館で無断で写真を撮ると怒られたときも、Ow many otos did you take?、と言われた。

この本は、読めば読むほど道のりの長いことを知らされ、心が沈んでくる。「完全なアクセントを身につけるには、シェフィールドに40年住まなければならない。それも2歳までに始めるのが望ましい」というのが、この本の結論らしい。

話は変わるが、日本の学校では今でも英語の時間に筆記体を教えているのだろうか。私の知っている大学生の多くが筆記体で書くのだから、きっとまだ教えているのだろう。しかし、私はイギリスで、サイン以外に目の前で筆記体を書かれたのを見たことがない。

シェフィールドでフラットを借りた時のことである。私は不動産屋の経営者とフラットで待ち合わせることにしていたのだが、私の泊まっていたホテルに彼が置いていった手紙には「ホテルで」とある。少なくとも私にはどう見ても「フラット」とは読めないのだ。ホテルの主人に相談したところ、たいへんな悪筆だが「ホテル」だろうと教えてくれた。そして、待ち合わせの時間には、もちろん彼は来ない。しばらくして電話があつて迎えに来てくれたのだが、彼に手紙を見せると、胸を張って「フラット」と書いてあるという。

インドで、ホテルの男性と少し込み入った話をしていた時。ヒンズーなまりの強い英語が聞き取りにくいのだが、「おまえは本当に英語がわかるのか」と聞かれて、思わずムツとし、「聞き取りは苦手だが、書いてくれたら完全にわかる」と言ってしまった。そして、書かれた文字を見て愕然とした。文字がまるでヒンズー語で、ほとんどわからないのだ。

しかし、かく言う私たちも、かなり癖のある字を書いていることを、あまり気づいていない。数字とアルファベットで、イギリス人に完全解読可能な字を書ける人など、実際はほとんどいないのではないだろうか。